

第3章

コスタリカにおける民主主義の価値

ーラティノバロメトロ調査に基づいた記述統計ー

久松 佳彰

要約：

コスタリカ共和国では、1919年以降軍部による政権の強奪やクーデタが行われないうまま今日に至っている。すなわち、90年を超える民主主義の伝統がある国と考えてよい。本章では、コスタリカ国民の間に、この長く続いた民主主義の価値が根付いているか、根付いているとすればどのような形で根付いているかを報告する。

1996年以降2009年までの非営利団体ラティノバロメトロによる、中南米主要国17国を対象とした世論調査を利用した。平均してコスタリカ国民の77%が民主主義を支持しており、民主主義に満足していると回答した割合も55%であった。いずれの数字も中南米諸国の中で高い数字であり、年間のばらつきも少ない。この背景には、民主主義に対して「手段としての価値 (instrumental value)」だけでなく「固有の価値 (intrinsic value)」をもつ国民が少なからず存在することが指摘できる。

キーワード：

民主主義、手段としての価値、固有の価値

はじめに

コスタリカ共和国では、1913年に初めて直接選挙によって大統領が選ばれたが、それに不満を抱いた将軍が1917年にクーデタを起こして政権についた。しかし、大衆の強い反発にあって1919年に退陣している。1919年以降、軍部による政権の強奪やクーデタが行われないうまま今日に至っている。すなわち、コスタリカ共和国は90年を超える民主主義の伝統がある国と考えてよい¹。本章では、コスタリカ国民の間に、この長く続いた民主主義の価値が根付いているか、根付いているとすればどのような形で根付いているかを1996年以降2009年までの非営利団体ラティノバロメトロによる世論調査結果を使って報告する。

以下の構成は次のとおりである。第1節では、経済学・哲学そして政治学にまたがって民主主義論を展開したアマルティア・センの議論を紹介し、民主主義には大きく分けて三つの価値、すなわち「固有の価値 (intrinsic value)」、「手段としての価値 (instrumental value)」、そして「構成的価値 (constructive value)」があることを確認する。続いて、以降で利用する民主主義の価値の概念図を提示し、説明する。第2節では、コスタリカ国民の民主主義に対する意見を、民主主義への支持、民主主義への満足度、そして民主主義の問題解決能力に絞って、中南米主要 17 国の中で比較して確認する。第3節では、民主主義の価値の概念図を更に操作化し、民主主義への支持、民主主義への満足度、そして民主主義の問題解決能力の間の相互関係をコスタリカ国民の意見に焦点を当てながら解明する。第4節は、結論と今後の課題である。

第1節 アマルティア・センに基づいた民主主義論

1. なぜアマルティア・センか

本節では、インド出身の 1998 年ノーベル経済学賞受賞者であるアマルティア・センの民主主義論を『自由と経済開発』(Sen [1999a]) および『正義のアイデア』(Sen [2009]) に依拠して紹介し、第2節以降の実証分析で利用する概念を整理する。

まず、なぜアマルティア・センに焦点をあてて、民主主義論を展開するのかについて簡単に説明する。理由は消極的理由と積極的理由の二つがある。消極的理由は、本章に与えられた紙面ではこれまでの政治学と哲学を中心とした民主主義論を包括的に整理することは不可能だからである。コスタリカの実証分析が中心である本章においては、何らかの取舍選択をしなければならない。積極的理由は、アマルティア・センは経済学・哲学そして政治学へも視野の行き届いた当代を代表する総合的な研究者＝知識人であるからである。加えて言えば、アマルティア・センは民主主義を高く評価していることも知られている。『普遍的価値としての民主主義』と題した *Journal of Democracy* に 1999 年に掲載された論文 (Sen [1999b]) の中で、1997 年夏に日本の有力新聞から 20 世紀でもっとも重要な事象は何だろうかと尋ねられ、彼はいろいろ考えたと述べてから、このように答えたことを紹介している。『しかしながら、20 世紀に起きた様々な出来事のなかで、この時期で傑出した出来事を選ぶのには何の苦労もなかった。それは民主主義の勃興である』(Sen [1999b])。論考の目的は、コスタリカの民主主義について、いわば巨人の肩に乗って遠くを見ようというのである。

センの民主主義論の特徴は、哲学においては先験的ではなく比較アプローチであり、政治学においては狭く制度的でなく包括的である特徴がある。『正義のアイデア』にお

いてセンは、ジョン・ロールズの正義論を先験的アプローチとして評価しながら、自らの手法を比較アプローチと整理した。先験的アプローチとは、最高の何か（例えば、正義について言えば「正しい状態」）を設定し、これを基準として現状への示唆を導き出すことを目的とする。センは卓抜な比喻を使っている。『もし我々がピカソとダリのどちらかを選ぼうとすると、この世で理想的な絵がモナリザだという診断（たとえそのような先験的診断が可能であるとしても）を行っても何の役にも立たない』（Sen [2009]）。言わば、センの比較アプローチは、ピカソとダリを選ぶ時の視点を提供するものである。それが各人のケイパビリティを重視する視点であることはすぐれて有名であろう（鈴木・後藤 [2002]）。

政治学を代表とする民主主義論としてダールのポリアーキーを考えてみよう。恒川恵市は『（前略）民主主義体制を構成する必要要素（到達点）が厳密に定義されている必要がある。おそらく、「自由で公正な選挙が定期的におこなわれる制度」という最小綱領的定義に異論はあるまい。しかしダールも指摘するように、自由で公正な選挙が実施されるためには、一連の政治的自由も保障されなければならない。ダールは特に結社、表現、情報の自由をあげている。このような選挙権や政治的権利が保障された体制がポリアーキーである。ダールはまた民主主義体制の特性として、政府が国民に責任を持って応えること（アカウンタビリティ）をあげている。』と紹介している（恒川 [2006]）。センが言う民主主義では、選挙における投票はもちろん大事だがそれだけではなく、自由な討論、情報へのアクセス、不同意の自由などが重要であるとして、「公共的推論の実践」、すなわち「討論による統治」という包括的な視点から民主主義の内容を評価している（Sen [2009]）。すなわち、政治学で言えば最小綱領的定義よりもポリアーキーの広い定義と似ていると言うべきである。

このようなセンの民主主義へのアプローチは、理想よりも比較をもとに考える時に威力を発揮し、また、選挙制度だけではなく人々の考えや価値判断も重視するときに有効であると考えられる。

2. アマルティア・センによる民主主義の価値

センは開発を扱った『自由と経済開発』の第6章「民主主義の重要性」において、わかりやすく民主主義の価値を整理している（Sen [1999a]）。すなわち、基本的な政治と自由の権利が重要だとする論拠には三つの異なった方向性があると述べている。第一には、基本的なケイパビリティと関連した、生活における直接的な重要性（*direct importance*）である。第二に、人々が政治的に意見を表明し、また賛同する自分の意見・主張を他人に聞いてもらうことを促進するという、手段としての役割（*instrumental role*）である。第三には、必要性というものを概念として生み出す活

動における構成的な役割 (*constructive role*) である。以下は、簡単にこの三つの方向性について説明する。

第一に、生活における直接的な重要性である。人々は自由や、表現と行動の自由そのものを高く評価する。そして、社会的生物である人間が、政治・社会活動への無制限の参加を高く評価することにも納得がゆくとセンは述べる。そして、我々の価値判断の形成には自由な情報の交流と議論が必要であり、政治的自由と市民権はそれを保障しているという。最後に、我々が価値を見いだす物事に関して、自由に発言し、また注意が与えられることを要求するためには、表現の自由と民主主義的な選択が必要であると述べている。

第二に、手段としての役割である。これは、統治者が選挙に直面している場合、人々の意見に耳を傾けるだろうという点から導き出される。センが発見した有名な事例であるが、飢餓は、独立し民主主義の政体と自由な報道機関をもつ国では起きたことが無いというのが一つの例である。つまり、民主主義が人々の問題を解決するという役割である。

第三に、構成的な役割である。これは新しい経済的な必要性を概念として作り出す役割である。つまり、何が経済的な必要性かということがきちんと理解されるには、議論の意見の交換が必要だと考えられる。すなわち、表現の自由を含む市民権に支えられて、よく熟考された選択がなされるというのだ。つまり、公共の討議によって価値や優先順位が形成されていくということをセンは主張した。

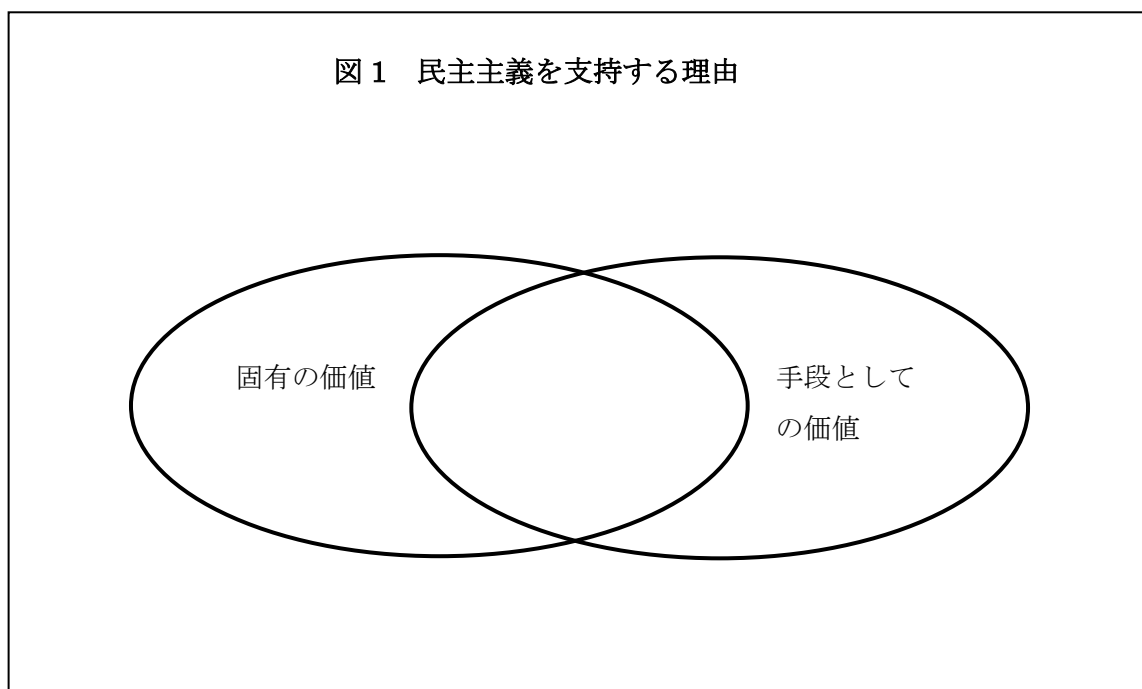
3. 民主主義の価値を操作可能化する

以上のように解説したセンの主張する民主主義の価値を、世論調査によって確認できるように操作可能化できるだろうか。ここでは、センの三つの点を、あえて二つの視角に集約することにする。第一は、民主主義の「固有の価値 (*intrinsic value*)」である。ここに、センの言う、生活における直接的な重要性と構成的な役割の双方を含めて考えることにする。表現の自由、政治的な自由、自由な意見交換はそれ自体として価値をもち、そして、自由な意見交換の中で、新しい経済的な必要性が認識されるという点も民主主義それ自体の固有の価値である²。

なぜ「固有の価値」に二点をまとめてしまったのかと言えば、構成的な役割を人々が認識することは難しいからである。センが言うように、人々は自らの認識を自らがおかれた状況に適応的に変化させるからである。新しい経済的な必要性は、開かれた討議の中で事後的に発見されるものであり、事前にそれを予期することは難しい³。そうであるならば、民主主義の構成的な役割を明示的に自覚することも難しいはずである。

第二は、「手段としての価値 (instrumental value)」である。これはセンも手段としての役割として評価している。社会の中の様々な問題解決の手段としての民主主義は、政体の中で、統治者が国民の意見を重要視するところに意味を持つ。ここには飢餓への対応ばかりでなく、病害などいろんな危機において人々の保護と保障が確保されるという結果がもたらされる。開かれた議論、公の精査、選挙活動、そして検閲されない報道機関の活動などによって、人々の困難が拡大しないように阻止される⁴。

このように整理すると、人々が民主主義を支持する、もしくは他の政体に比べて支持する理由は二つに分けられる。一つは、民主主義に「固有の価値」があるからであり、もう一つは、民主主義に「手段としての価値」があるからである。ある人はその二つを持っていても良いし、どちらか一つでも民主主義を支持する理由となるであろう。この点を図にしたものが図1である。二つの楕円によって民主主義への支持する人々は表される。楕円の外側には特段に民主主義を支持しない人が位置することになる。では、中南米諸国で行われた世論調査を元にして、コスタリカを中心にしながら人々は民主主義に対してどのような態度を取っているかを見ていこう。



(出所) 筆者作成。

第2節 ラティノバロメトロ調査を元にした中南米主要国比較

1. ラティノバロメトロとは

ラティノバロメトロ (Latinobarómetro) とは、民間の非営利団体であり、チリ国サンティアゴ市に本部を置き、1995 年から始めたラティノバロメトロ調査の実施と配布を担当している。本研究では、1996 年からコスタリカ国の調査も含まれたこともあり、1996 年から 2009 年まで 1999 年を除いた 13 年分の個票データをラティノバロメトロのウェブ・ページ (<http://www.latinobarometro.org/>) よりダウンロードして統計ソフトウェア SPSS によって記述統計を行った。

標本サイズは、コスタリカについて言えば毎年約千人である。他の中南米諸国については 1000~1200 人である。サンプルには老若男女が含まれ、国民の政治意識に関する意見を尋ねている。質問票は、毎年多少変化するが、毎年通じて同じ質問も存在する。民主主義について言えば、政治参加や表現の自由がどのくらい実行されているかというような具体的な質問も行われているが、本章では、アマルティア・センの包括的な視点に立って民主主義に関する三つの質問に焦点をあてることにする。

2. 民主主義への支持、満足度、手段としての有効性

ラティノバロメトロ調査では、それぞれ民主主義への支持、満足度、手段としての有効性に関連した三つの質問が行われている。

第一に、民主主義へ支持に関する質問であるが、以下のような質問によって問われている。

(質問) 以下の文の中で、貴方が同意する意見を一つ選びなさい。

- (答え) 1. 民主主義は他のどの政体よりも望ましい。
2. ある場合には、権威主義的な政府は民主的な政府よりも望ましい場合がある。
3. 私にとっては、民主政体でも非民主政体でもどちらでも同じである。
4. わからない
5. 無回答

我々は、この質問に関して回答者が 1 を選んだ場合に、彼（女）は民主主義を支持しているとみなすことにする。この質問は、1996 年から 2009 年まで 1999 年を除いた 13 年間にわたって行われている。

第二に、民主主義への満足度に関する質問であるが、以下のような質問によって問われている。

(質問) 一般的には、貴方は自分の国での民主主義の働き方（スペイン語では *funcionamiento*、英訳では *working*）について、現在、とても満足しているか、ある程度満足しているか、あまり満足していないか、全く満足していないか。

- (答え) 1. とても満足している。
2. ある程度満足している。
3. あまり満足していない。
4. 全く満足していない。
5. わからない。
6. 無回答

我々は、この質問に関して、回答者が1もしくは2を選んだ場合に、彼（女）は民主主義に満足しているとみなすことにする。この質問も、1996年から2009年まで1999年を除いた13年間にわたって行われている。

第三に、民主主義の手段としての有効性に関する質問であるが、以下のような質問によって問われている。

(質問) 民主主義のおかげでこの国の問題（複数形）が解決されると言う人が存在します。民主主義は問題（複数形）を解決しないと言う人も存在します。下記の文のなかで、貴方の考えに最も近い考えはどれでしょうか。

- (答え) 1. 民主主義は問題（複数形）を解決する。
2. 民主主義は問題（複数形）を解決しない。
3. わからない。
4. 無回答

我々は、この質問に関して、回答者が1を選んだ場合に、彼（女）は民主主義の手段としての有効性を信じているとみなすことにする。この質問は、2002、2005、2008、2009年の4年だけ実施されているので、結果は4年分しか残されていない。

これらの包括的な民主主義への考え方を問う質問への回答からコスタリカ国民の特徴を他国と比較して把握することとしよう。

3. 各指標における国別年別の結果

まず、民主主義への支持である。前項で示した民主主義を支持する回答者を分子、全体の回答者（わからない、無回答も含む）を分母として、割合を示したものが表1である。コスタリカ国民の民主主義への支持は、平均で77%であり、ウルグアイ(81%)に次いで高く、そのばらつき度を変動係数で測れば、ウルグアイに次いで低い。すなわち、90年代後半から2000年代を通じて、コスタリカ国民は一貫して安定して民主主義を支持してきたということになる。

表 1 中南米主要 16 カ国における「民主主義への支持」の割合

	1996	1997	1998	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	平均	標準偏差	変動係数
アルゼンチン	73%	77%	74%	71%	59%	65%	69%	66%	66%	73%	63%	60%	64%	68%	0.056	0.082
ボリビア	67%	69%	59%	68%	61%	52%	50%	56%	52%	62%	67%	68%	71%	62%	0.074	0.120
ブラジル	53%	56%	51%	42%	38%	37%	35%	48%	37%	46%	43%	47%	55%	45%	0.072	0.159
コロンビア	61%	71%	60%	54%	49%	39%	46%	56%	46%	53%	48%	58%	50%	53%	0.083	0.157
コスタリカ	84%	85%	72%	88%	78%	77%	78%	74%	73%	75%	83%	67%	74%	77%	0.058	0.075
チリ	57%	63%	54%	55%	51%	50%	51%	62%	62%	56%	46%	52%	59%	55%	0.052	0.095
エクアドル	56%	45%	60%	58%	45%	47%	45%	48%	43%	54%	65%	56%	43%	51%	0.072	0.141
エルサルバドル	62%	70%	80%	66%	36%	40%	45%	65%	59%	52%	39%	48%	68%	56%	0.138	0.245
グアテマラ	56%	53%	54%	51%	45%	45%	33%	49%	32%	41%	32%	34%	42%	44%	0.088	0.201
ホンジュラス	49%	66%	65%	70%	65%	57%	55%	51%	32%	50%	38%	44%	55%	54%	0.113	0.211
メキシコ	57%	53%	52%	46%	46%	63%	53%	55%	58%	54%	48%	43%	42%	52%	0.062	0.120
ニカラグア	64%	70%	75%	68%	47%	63%	51%	50%	57%	57%	62%	58%	55%	60%	0.082	0.138
パナマ	77%	74%	75%	65%	39%	55%	51%	70%	52%	55%	62%	55%	64%	61%	0.111	0.181
パラグアイ	61%	46%	52%	46%	37%	41%	39%	45%	33%	43%	35%	53%	46%	44%	0.077	0.173
ペルー	70%	67%	68%	71%	71%	55%	50%	50%	40%	55%	47%	45%	52%	57%	0.110	0.193
ウルグアイ	83%	88%	83%	84%	82%	77%	78%	83%	77%	77%	75%	79%	82%	81%	0.037	0.046
ベネズエラ	66%	66%	61%	64%	61%	73%	68%	77%	78%	70%	67%	82%	84%	70%	0.075	0.106

(出所) ラティノバロメトロ調査各年を元に筆者作成。

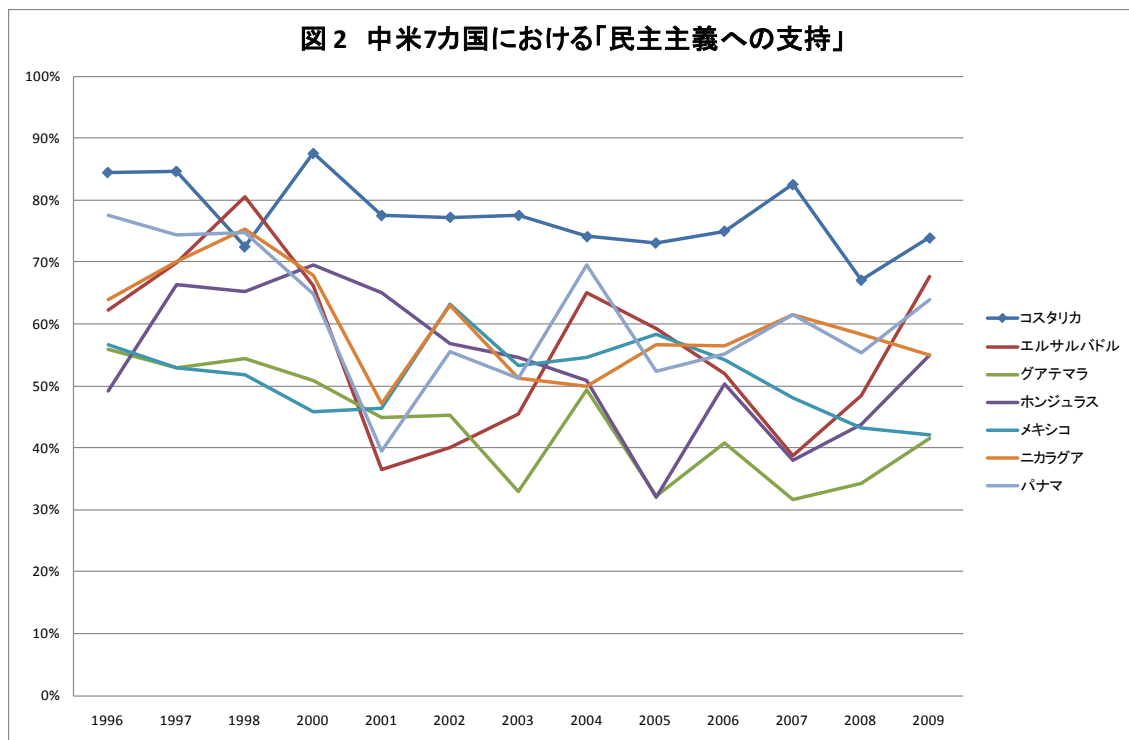
表 2 中南米主要 16 カ国における「民主主義への満足度」の割合

	1996	1997	1998	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	平均	標準偏差	変動係数
アルゼンチン	35%	42%	50%	47%	21%	8%	34%	34%	34%	51%	33%	34%	36%	35%	0.115	0.326
ボリビア	25%	34%	37%	23%	18%	24%	25%	19%	22%	39%	41%	33%	50%	30%	0.097	0.324
ブラジル	22%	24%	27%	20%	24%	21%	28%	30%	22%	36%	30%	38%	48%	28%	0.081	0.285
コロンビア	16%	40%	25%	30%	12%	11%	22%	31%	29%	33%	32%	40%	42%	28%	0.104	0.371
コスタリカ	54%	69%	61%	63%	54%	75%	46%	53%	39%	48%	47%	44%	63%	55%	0.105	0.190
チリ	29%	38%	33%	34%	27%	28%	33%	44%	46%	42%	37%	41%	53%	37%	0.078	0.209
エクアドル	35%	31%	35%	24%	16%	16%	24%	14%	14%	22%	35%	37%	33%	26%	0.088	0.344
エルサルバドル	28%	49%	48%	28%	26%	38%	33%	44%	36%	25%	34%	37%	60%	37%	0.104	0.279
グアテマラ	18%	43%	57%	38%	20%	35%	21%	24%	28%	31%	30%	27%	30%	31%	0.107	0.343
ホンジュラス	21%	51%	42%	46%	34%	62%	37%	32%	26%	34%	30%	25%	31%	36%	0.115	0.317
ニカラグア	12%	46%	22%	37%	28%	18%	18%	18%	23%	41%	31%	23%	28%	27%	0.099	0.372
メキシコ	25%	52%	27%	17%	26%	59%	31%	23%	18%	26%	43%	38%	35%	32%	0.128	0.397
パナマ	28%	40%	34%	48%	24%	44%	24%	36%	20%	40%	38%	34%	61%	36%	0.111	0.306
パラグアイ	22%	16%	24%	13%	11%	7%	9%	14%	15%	12%	9%	23%	31%	16%	0.072	0.458
ペルー	30%	22%	18%	25%	18%	18%	11%	6%	13%	23%	17%	16%	22%	18%	0.063	0.343
ウルグアイ	52%	66%	70%	70%	57%	53%	44%	45%	63%	66%	66%	71%	79%	62%	0.107	0.173
ベネズエラ	31%	36%	36%	56%	42%	40%	37%	43%	55%	57%	59%	49%	49%	45%	0.094	0.206

(出所) ラティノバロメトロ調査各年を元に筆者作成。

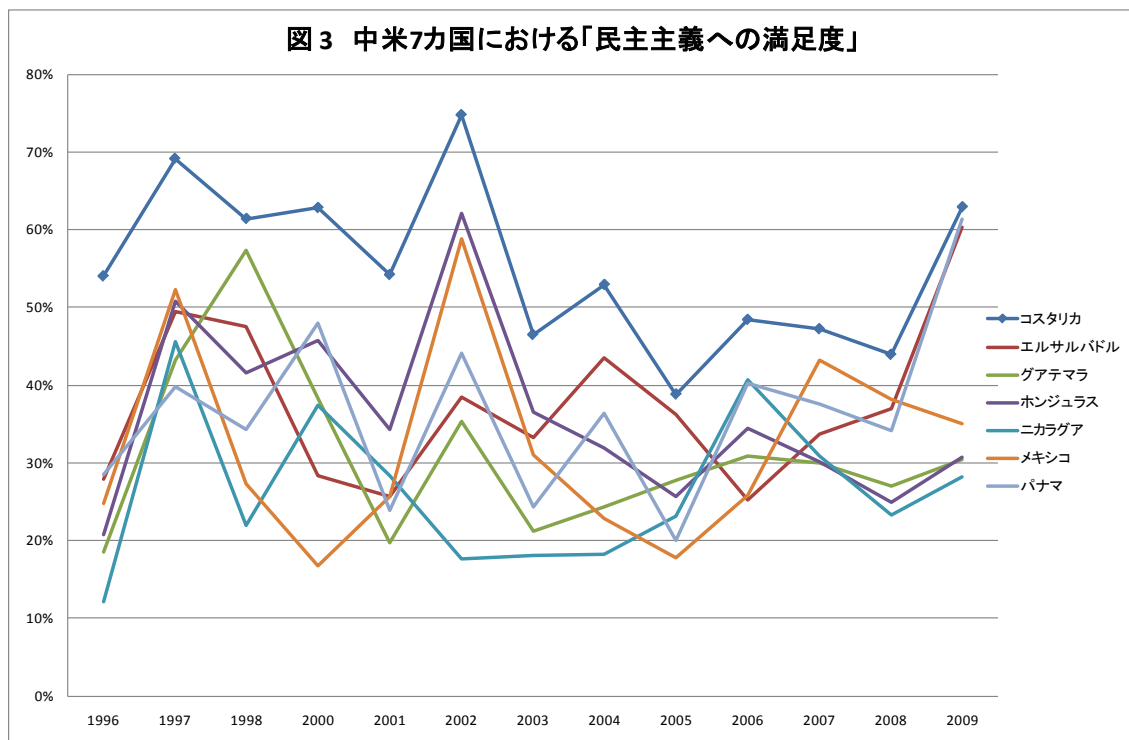
次に、民主主義への満足度である。前項で示した民主主義に満足していると回答した回答者の数を分子、全体の回答者（わからない、無回答も含む）を分母として、割合を示したものが表2である。コスタリカ国民の民主主義への満足度は、平均で55%と、やはりウルグアイ（62%）に次いで高く、その安定性を変動係数で測れば、やはりウルグアイに次いで安定している。

この結果をコスタリカが近接する中米・メキシコ6カ国と比べたのが図2と図3である。



（出所）ラティノバロメトロ調査各年を元に筆者作成。

図2では、民主主義への支持は、コスタリカが抜群に高いことがわかる。1998年を除けば、各年とも域内で第一位を占めている。図3の民主主義への満足度も、上下動はあるものの、コスタリカは域内で第一位を占めている。このように各年において差はあるものの、1990年代後半から2000年代にかけてコスタリカ国民の7割強が民主主義を支持し、5割強が民主主義に満足しているということがわかった。



(出所) ラティノバロメトロ調査各年を元に筆者作成。

最後に、民主主義の手段としての有効性を見よう。先ほども述べたように、この質問については、この質問は、2002、2005、2008、2009年の4年だけ実施されている。民主主義の手段として有効性があると回答した回答者の数を分子として、全体の回答者（わからない、無回答も含む）を分母として、割合を示したものが表3である。

この指標において、コスタリカの結果は興味深い。4年間の平均で56%であるから、国民の半分強は民主主義が問題を解決すると答えていることになる。しかし、各国と比較すると、第1位はベネズエラ（74%）、第2位はニカラグア（60%）、第3位はボリビア（58%）、第4位がウルグアイ（57%）であり、コスタリカは域内で第5位になっている。必ずしも域内では高いとは言えないのである。

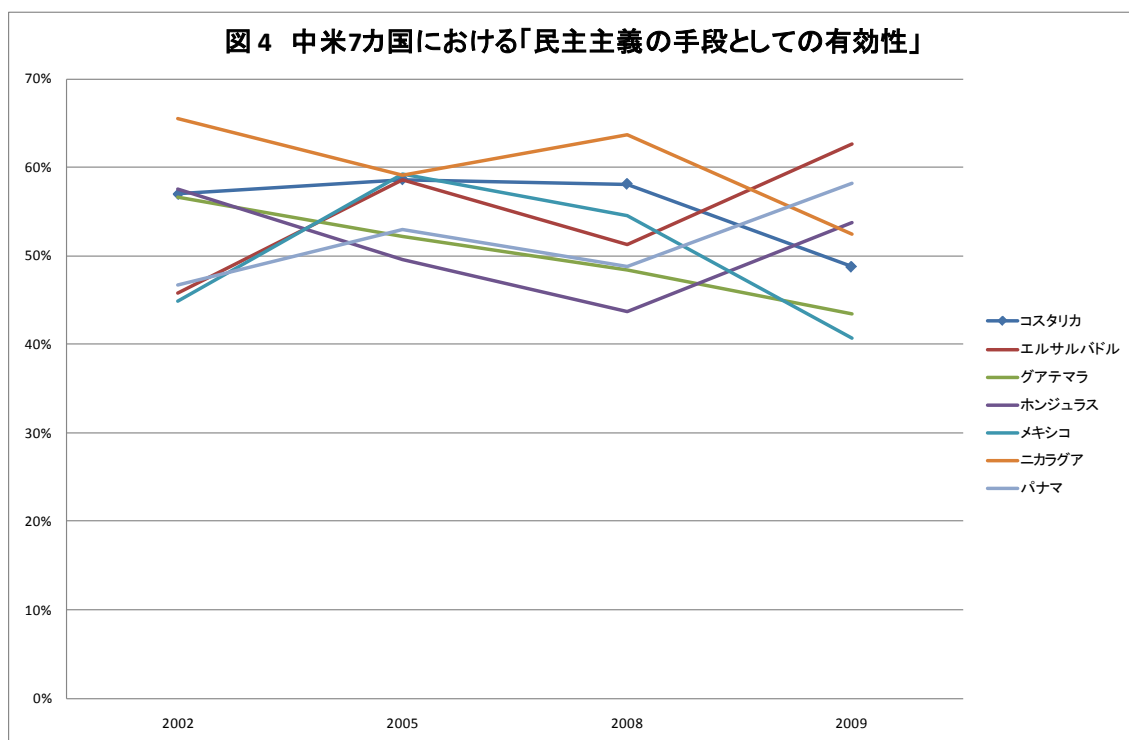
この点は、中米・メキシコの中での比較でも顕著である。図4では、域内1位ではなく、2009年には下位に沈んでいる。このようにコスタリカ国民は他の指標が域内で抜群に高かったことを考えると、民主主義の問題解決能力について評価があまり高いわけではない（特に2009年）といってもよいだろう。

この点をより検討するために、次節では、アマルティア・センの民主主義の価値の枠組みをより操作化して用いて、コスタリカ国民のもつ民主主義の価値のあり方を検討することとしよう。

表 3 中南米主要 16 カ国における「民主主義の手段としての有効性」の割合

	2002	2005	2008	2009	平均
アルゼンチン	34%	49%	52%	45%	45%
ボリビア	52%	52%	67%	63%	58%
ブラジル	49%	40%	53%	47%	47%
コロンビア	40%	58%	66%	46%	52%
コスタリカ	57%	59%	58%	49%	56%
チリ	43%	52%	46%	46%	47%
エクアドル	46%	43%	54%	40%	46%
エルサルバドル	46%	59%	51%	63%	55%
グアテマラ	57%	52%	48%	43%	50%
ホンジュラス	58%	50%	44%	54%	51%
メキシコ	45%	59%	55%	41%	50%
ニカラグア	65%	59%	64%	52%	60%
パナマ	47%	53%	49%	58%	52%
パラグアイ	22%	28%	44%	28%	30%
ペルー	52%	48%	47%	43%	47%
ウルグアイ	42%	66%	53%	66%	57%
ベネズエラ	61%	77%	81%	77%	74%

(出所) ラティノバロメトロ調査各年を元に筆者作成。



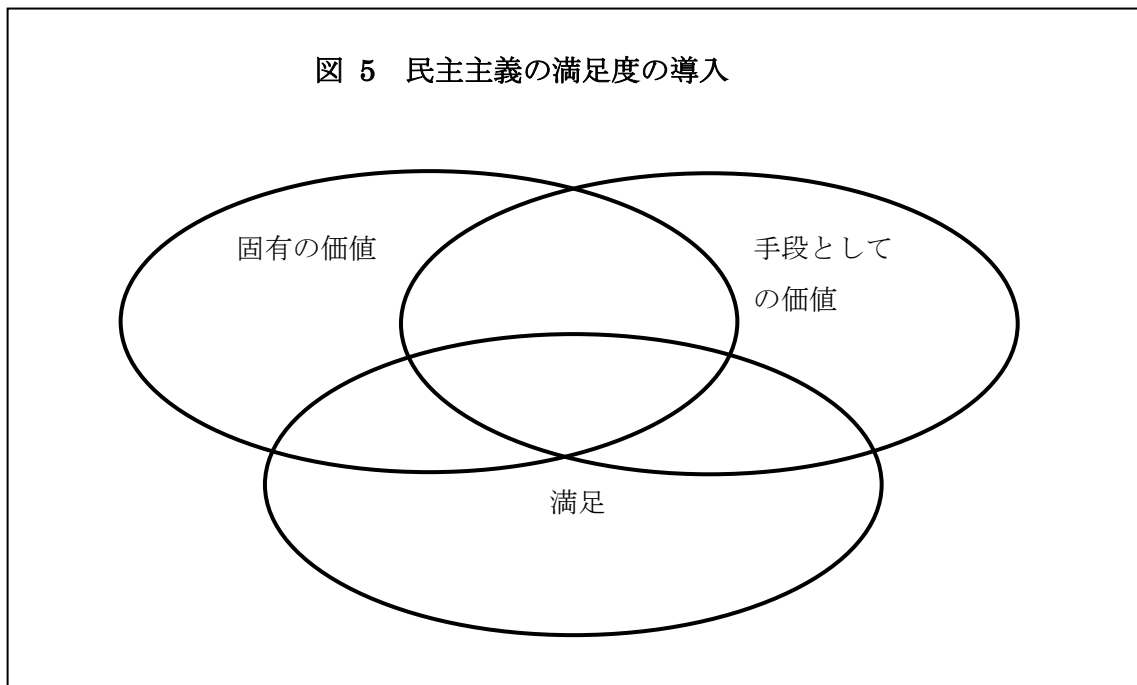
(出所) ラティノバロメトロ調査各年を元に筆者作成。

第3節 コスタリカにおける民主主義の価値

1. センの枠組みの更なる操作化

すでに第1節第3項において、アマルティア・センの三つの民主主義の方向性を二つの価値に集約した。本項では、前節で紹介した、三つの質問を理解するために更に操作化を行う。

第一に、民主主義に満足するという視点を、民主主義を支持することは別に導入しよう。人々には、満足していながら支持するという人もいるだろうし、満足していないが支持するという人もいるだろう。このことを表したのが図5である。



(出所) 筆者作成。

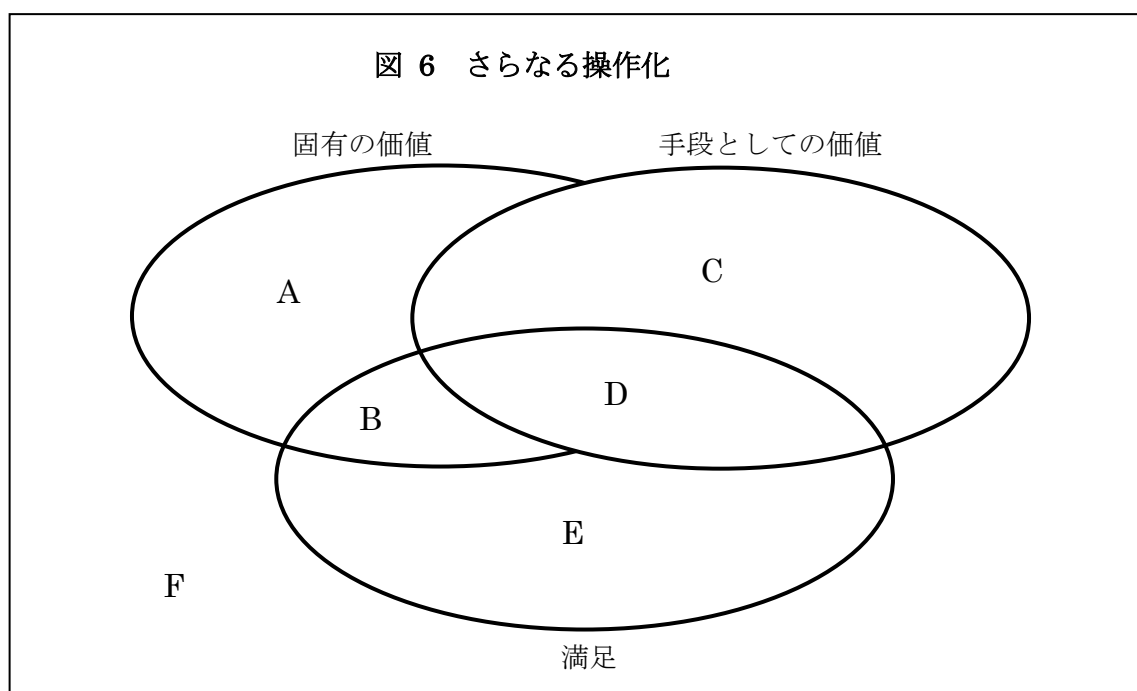
このように考えると、第2節で紹介した三つの質問の答えにより、表4と図6のようにA～Fまでの6つのグループを考えることができよう。

簡単に説明しよう。Aグループは、民主主義を支持するが、手段としての価値からという理由ではない。すなわち、民主主義は問題を解決しないと答えることになる。加えて、民主主義の現状に満足していないグループである。Bグループが、Aグループと異なるのは民主主義の現状に満足していることだけである。

表 4 更なる操作化

グループ	民主主義の支持	民主主義の手段の有効性	民主主義の満足度
A	○	×	×
B	○	×	○
C	○	○	×
D	○	○	○
E	×	×	○
F	×	×	×

(出所) 筆者作成。



(出所) 筆者作成。

Cグループは、民主主義を支持し、民主主義の手段の有効性も信じている。但し、固有の価値を見いだしているか否かは明らかではない。但し、民主主義の現状には満足していない。Dグループは、Cグループと違って、民主主義の現状に満足している。

以上のようにA～Dグループまでが、民主主義を支持するグループである。その他にはEグループという、民主主義を支持せず、民主主義は問題を解決しないと考えているが、民主主義の現状に満足しているグループがあり、最後に、残りのFグループが存在している。

表 5 コスタリカにおける民主主義の価値

グループ	2002 年	2005 年	2008 年	2009 年
A	44 (4%)	146 (15%)	120 (12%)	114 (11%)
B	167 (17%)	75 (8%)	75 (8%)	194 (19%)
A+B	221 (21%)	221 (22%)	195 (20%)	308 (31%)
C	75 (7%)	227 (23%)	198 (20%)	113 (11%)
D	399 (40%)	231 (23%)	237 (24%)	281 (28%)
A+B+C+D	685 (68%)	679 (68%)	630 (63%)	702 (70%)
E	91 (9%)	37 (4%)	101 (10%)	110 (11%)
F	230 (23%)	284 (28%)	269 (27%)	188 (19%)
サンプル数	1006 (100%)	1000 (100%)	1000 (100%)	1000 (100%)

(出所) ラティノバロメトロ調査各年を元に筆者作成。

(注) () 内はサンプル数の%。各質問に応じて「わからない」・「無回答」が存在するので、A+B の合計は表 1 の結果と一致しない。

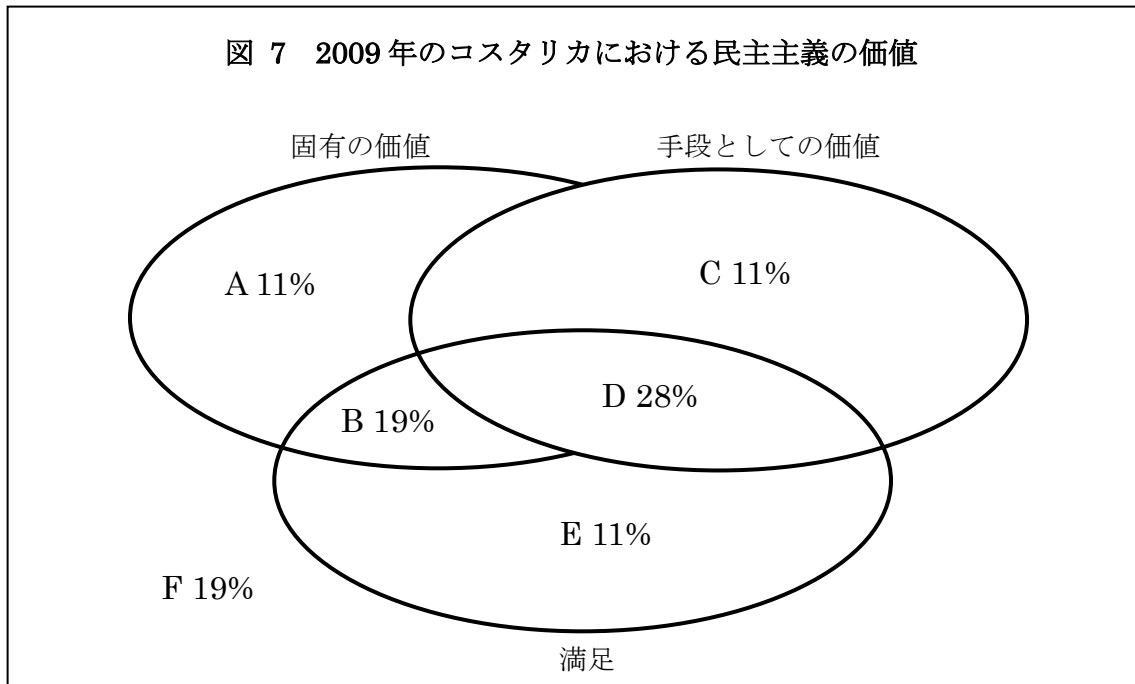
表 4 を手がかりに、クロス表を 3 つの質問が揃う 2002、2005、2008、2009 年の 4 年間の各サンプルについて作成し、グループ別の人数と全サンプル数に対する割合を示したものが表 5 である。この表 5 を元に、2009 年のコスタリカ国民の民主主義に対する価値判断を図示したものが図 7 である。

図 7 からわかることは、コスタリカ国民の 7 割が民主主義を支持するのだが、その内訳は、『手段としての価値』を認める人ばかりではない。『手段としての価値』を認めるのはコスタリカ国民の約 4 割であり、『固有の価値』からのみ民主主義を支持するコスタリカ国民が約 3 割いるのである。

そして、その 3 割の中では、民主主義の現状に満足している者 (B グループ) のほうが満足していない者 (A グループ) より多い。これは 2009 年だけでなく、2002 年でも同じ状況が発生している。しかし、2005 年と 2008 年では逆転している。すなわち、民主主義への『固有の価値』からの支持は満足度とはほぼ独立して存在する。この民主主義の『固有の価値』を認める人々の存在が、コスタリカ国民の民主主義の支持の高さと安定性を支えているのではないかと考えられる。

このことを検討するために、2009 年において民主主義の価値を中米 5 カ国及びメキシコと比べてみたのが表 6 と図 8 である。コスタリカに顕著なのは「固有の価値」からの民主主義の支持の大きさである。コスタリカ以外の国は「手段としての価値」からの民主主義の支持が大きいのが特徴である。民主主義への支持が強いエルサルバドルやパナマと比べると支持する要因の違いが際立って異なる⁵。

図 7 2009 年のコスタリカにおける民主主義の価値



(出所) ラティノバロメトロ調査 2009 年を元に筆者作成。

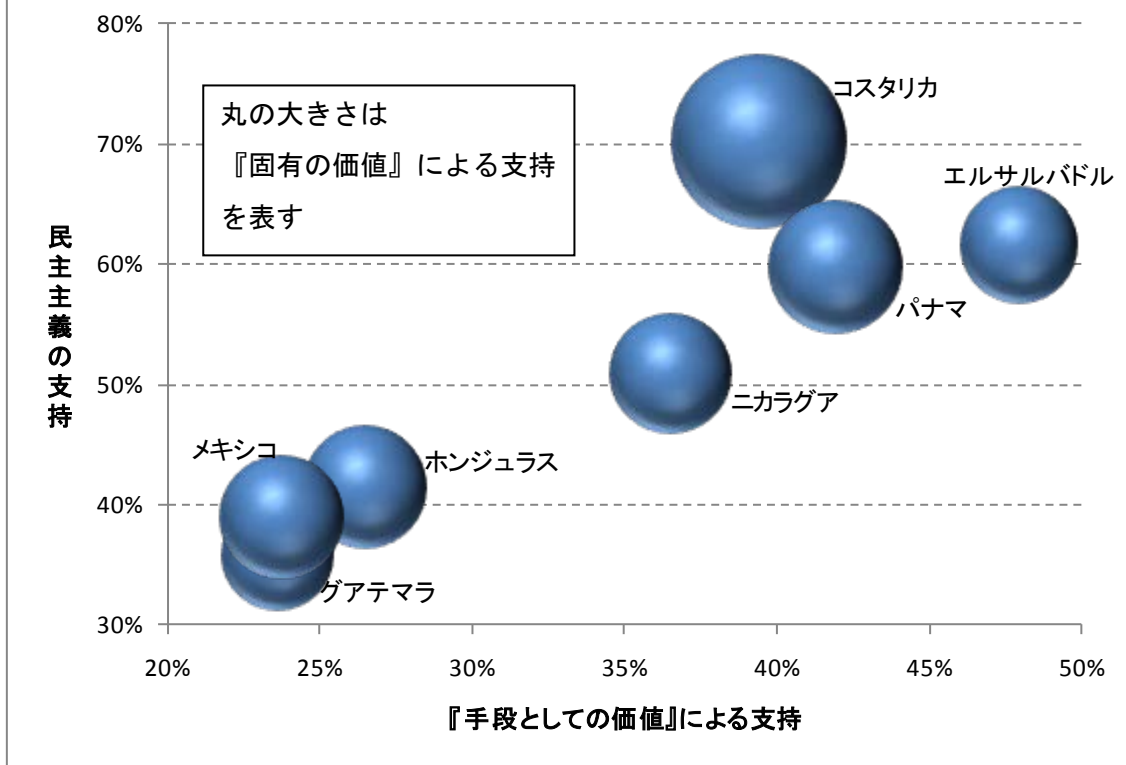
表 6 中米各国・メキシコの民主主義の価値 (2009 年)

グループ	コスタリカ	エルサルバドル	グアテマラ	
A	11%	8%	9%	
B	19%	6%	4%	
A+B	31%	14%	12%	
C	11%	24%	14%	
D	28%	24%	10%	
A+B+C+D	70%	62%	36%	
グループ	ホンジュラス	ニカラグア	パナマ	メキシコ
A	13%	11%	11%	13%
B	2%	3%	7%	2%
A+B	15%	14%	18%	15%
C	19%	27%	23%	19%
D	7%	10%	19%	5%
A+B+C+D	42%	51%	60%	39%

(出所) ラティノバロメトロ調査 2009 年を元に筆者作成。

(注) パーセンテージはサンプル数で割った数字。回答からは「わからない」や「無回答」は除いてあるので、A+B+C+D の結果は表 1 の結果より小さくなっている。

**図 8 中米・メキシコにおける民主主義の支持
2009年ラティノバロメトロ調査**



(出所) 2009 年ラティノバロメトロ調査を元に筆者作成。

表 5 を見ると、コスタリカにおける『固有の価値』による支持は、21% (2002 年)、22% (2005 年)、20% (2008 年) と、2009 年の 31% よりも低い。しかし、いずれの数字も表 6 のコスタリカ以外の国で最大のパナマ (18%) を超えているので、やはりコスタリカにおける民主主義の価値で顕著なのは、「固有の価値」からの民主主義の支持の大きさだと言えよう⁶。

第 4 節 結論と今後の課題

1. 結論

本章は、コスタリカの政治経済に焦点をあてる研究会の 2011/2012 年度の二年間の中間成果であるので、あくまでも本節で述べる結論は暫定的なものにならざるをえない。そのことを断った上で、本章で得た知見とその意義を三点にまとめる。

第一に、アマルティア・センによる民主主義の価値を操作可能な形にまで集約し、コスタリカという 90 年以上の民主主義の伝統がある国の世論調査に適用したことで

ある。センは民主主義の価値として、①「生活における直接的な重要性」、②「手段としての役割」、③「構成的な役割」の三つを指摘した。本章では、①と③を集約して「固有の価値」と名付け、「手段としての価値」と合わせて二つの民主主義を支持する価値判断とした。

第二に、ラティノバロメトロ調査における三つの質問「民主主義への支持」、「民主主義への満足度」、「民主主義の手段としての有効性」への回答について、中南米 17 カ国の中で 1990 年代後半から 2000 年代まで検討した。コスタリカの特徴は、「民主主義への支持」、「民主主義への満足度」の両方において、高く安定した肯定的評価が観察されたことである。このことをもって、相当な程度まで民主主義が根付いていることが伺われる。但し、興味深いことに「民主主義の手段としての有効性」については、前述した 2 指標に比べて必ずしも高い評価とは言えないこともわかった。

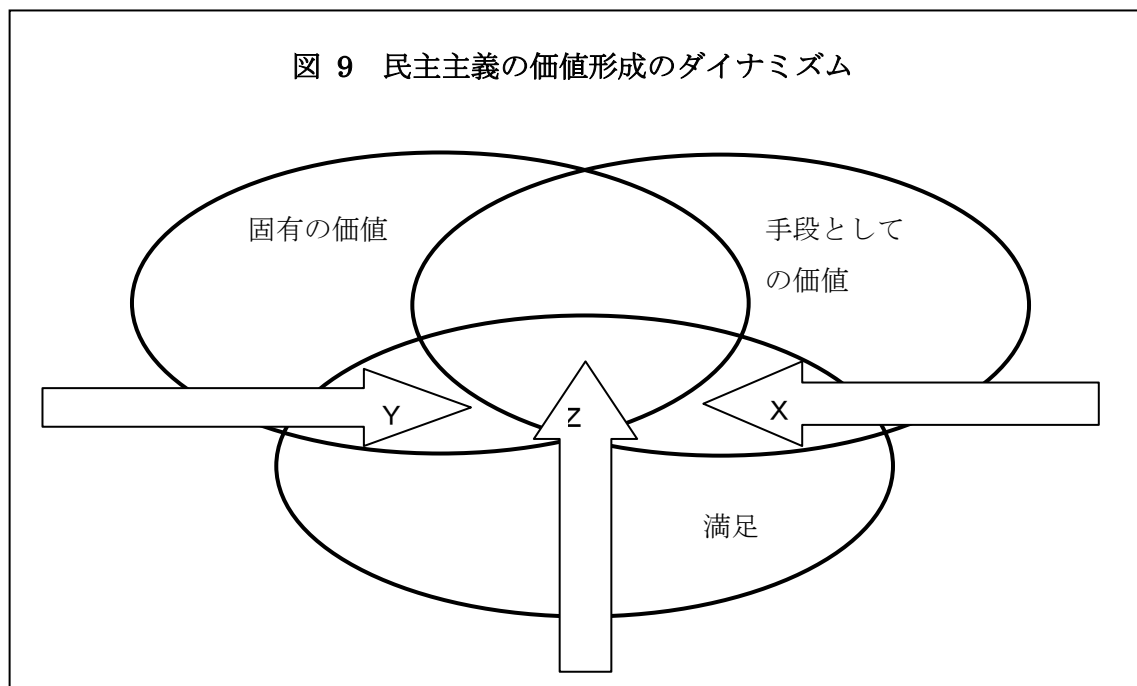
第三に、この三つの質問の相互関係を検討するために、センの洞察を操作化した枠組みを用いて、コスタリカ国民の民主主義の「固有の価値」と「手段としての価値」への評価を数量的におこなった。結果、民主主義を支持するコスタリカ国民の少なからぬ部分が「手段としての価値」というより「固有の価値」から民主主義を支持していることが観察された。この「固有の価値」からの民主主義への評価こそが、コスタリカにおける民主主義の根付き方の特徴であろうと考えられる。

2. 今後の課題（その 1）：民主主義の価値形成ダイナミズムの解明

比較政治学の大きな課題の一つに民主主義体制の長期的持続の条件の解明がある。例えば、恒川は、『「紛争や抑圧の経験を通しての学習」を理論構築の出発点に据えるべきだということであろう。人々が結果のいかににかかわらず民主主義のルールを受け入れるようになるためには、自分の利益や意見が直ちに実現されなくても、暴力的・威嚇的な手段に訴えることなく、他者との平和共存を重視する必要がある。そうした状態は、人々が長期にわたるこんな紛争や抑圧を経験する中での、相互の妥協や民主主義遵守の重要性を学習する結果として実現されると考えるのである。』と自らの「民主化の紛争理論」をまとめている（恒川 [2006]）。

民主主義の学習とは、紛争や抑圧を経験する中でのみ学習されるのだろうか⁷。そうであるとすれば、90 年以上も民主主義の実践を続けてきたコスタリカの現状についての研究は民主主義体制の長期的持続の解明にあまり貢献しないことになるかもしれない。しかしながら、少なくとも民主主義継続に向けての人々の学習は、民主主義の中でも経験・学習されるのではないだろうか。特に、センが指摘した「構成的な役割」、新しい経済的必要性を開かれた議論のなかで確認していく過程は、まさに民主主義の中でこそ経験・学習されるのではないだろうか。

このように考えると、コスタリカのような民主主義国家において、民主主義の学習がどのようにダイナミックに行われるかを解明することは重要であるように思われる。ここでは、図9をつかって予備的な素描をおこなっておこう。原理的には、民主主義の支持は、「手段としての価値」（図中X）の学習によってなされる場合、「固有の価値」（図中Y）の学習によってなされる場合、そして、同時に二つの価値（図中Z）の学習によってなされる場合の三つが考えられる。そして、民主主義を支持することになったとしても、二つの価値の中を、満足度の変化を伴いながら、移動を続けていくことになるであろう。時によっては、民主主義の価値を失う人も出てくるだろう。それは、X Y Zのどの経路を逆流して流出していくのだろうか。それは、どのような国内外の出来事と関係しているのだろうか。



（出所）筆者作成。

3. 今後の課題（その2）：民主主義の価値の担い手

誰が民主主義の価値の担い手になりやすいのだろうか。センは知識・情報の咀嚼が重要であるとしているので、教育を受けた層、例えば、中間層は民主主義価値の担い手として重要なのだろうか。年齢や性別は関係するのだろうか。それとも、民主主義にとって重要なある事件・事象に遭遇した特定コホートが担い手になるのだろうか。

例えば中間層の役割を考えてみよう。ここでアラン・クルーガーによる『テロの経済学』を検討することは示唆に富む（Krueger [2007]）。クルーガーは2012年2月現

在アメリカ合衆国政府の大統領経済諮問委員会の委員長を務めている労働経済学者である。彼は 2007 年に発表した『テロの経済学：人はなぜテロリストになるのか』において、ブッシュ政権や世界銀行が 1990 年代に主張した『貧困がテロリズムの根本原因である』という議論を強く批判し、テロ行為は路上犯罪よりも投票行動のほうに似ていると主張した。

経済学の標準的な考え方では、高賃金の職に就き、かつ高い教育を受けている人のほうが、時間の機会費用が高いため、効率の悪い投票には行かないと想定するが、実際のところ、投票に行く人を調べるとまさにその時間の機会費用が高い人たちだという結果がある。この「矛盾」の説明は、こうなされる。投票に行く人たちは選挙結果に影響を及ぼしたいと考えており、また彼らこそが十分に高い教育を受けているため、自分の声を表明したいと考えているためである。テロリストも政治的結果に影響を及ぼしたいと考えており、理想のためなら死んでもよいと考えるほどの理想に、強い関心を持っているのだとクルーガーは述べ、整合的な実証結果を提示した。

まさに中間層こそが教育を受けているために、自分の声を政治の場に表明したいと考える人々なのだというクルーガーの指摘は、民主主義の価値の担い手をどこに求めるかという検討において示唆に富む⁸。

中間層については最近多くのクロス・セクションの実証研究が公刊されている⁹。例えば、実証研究ではロペス・カルバ＝リゴリーニ＝トルチェ（Lopez-Calva et al. [2011]）が 2007 年に CIEPLAN によって中南米 7 カ国¹⁰で実施された Ecosocial 調査を使って、厳密に特定化された中南米の中間層に特徴的な価値観はあるかどうかを調べている。彼らの結論は、中間層に特有の価値判断は見られないというものであった。価値判断は所得と相関するため、中間層の価値観は、貧困層と富裕層のその間に位置することを見いだしている。

このようなクロス・セクションの実証研究の結果を補完するのは、通時的な実証研究であろう。アンケート調査において異時点間の変化が大きい場合には、特に通時的な視点が重要であろう。

4. 今後の課題（その 3）：長期的な研究との整合性

より長期的な政治経済的視覚の中で、どのように本研究の視点は伸ばすことができるだろうか。コスタリカの歴史分析についても、世界大の数量分析についても長期的な分析においては決定的転換期（critical juncture）と経路依存（path dependence）がキーワードとなっている。

コスタリカの政治経済分析においては、マホニー（Mahoney [2001]）は、政治体制の成立について、19 世紀後半の輸出農業拡大期の中米に注目した。彼は、輸出農業エ

リート、自由主義者、軍事的政治的リーダー（国家）、そして農民というセクターの関係によって、中米ではそれぞれ異なった政治体制が形成されていったと分析した。特に、コスタリカでは、当時、軍事的に強力な国家が存在しなかったために、自由主義者が輸出農業の拡大を図る際に、国家の強権に依存して強引に土地を集積することができず、その結果として多数の中小農民がそのまま残ることとなった。このことが、革命と反動の相互作用による権威主義体制化を回避する要因になったというのである。

世界大の数量分析においては、アセモグル、ジョンソン、ロビンソン&ヤリードの研究（Acemoglu et al. [2005], [2008]）が示唆に富む。彼らは、所得と民主主義、及び教育と民主主義の関係を 500 年間にわたって調査したが、両者の間には相関関係は見られるものの各国の固定効果などをコントロールすると関係が見えなくなることを示した。この実証結果と整合的な彼らの仮説は、それぞれの国に特有の決定的転換期において政治経済の発展経路が決定され、それぞれの決定的転換期で所得と教育と民主主義のいずれもが向上する国と、いずれもが停滞する国が発生すると考えた。彼らは決定的転換を引き起こす原因として、封建主義の崩壊、工業化の躍進、植民地化の進行などを挙げている。

このような長期的視点をもった研究をふまえた検討課題としては、現在起きているグローバル化や、先進国を中心として起きている大不景気（Great Recession）が上記の決定的転換期に起きた事象と同程度の影響力をもつ事象か否かを精査し、それが影響力を持つとすれば、各国の政治経済にどのような影響を与えるかを検討するといった課題が考えられる。

以上のような多岐にわたる今後の課題を念頭におきながら研究を進めたい。

¹ コスタリカ政治における民主主義については、本書山岡論文（第 2 章）も参考になる。

² 有名な引用句をひも解けば、英国の小説家 E. M. フォスターは『民主主義に二度乾杯しよう。一度は、多様性を涵養することに、そしてもう一度は、批判を受け入れることに。』と言ったとされる。

³ 二代目竹田出雲・三好松洛・並木千柳による『仮名手本忠臣蔵』の大序に、『嘉肴ありといえども、食せざればその味わいを知らずとは、国治まって良き武士の、忠も武勇も隠るるに、たとえば星の昼見えず、夜は隠れて顕わるる、ためしをここに仮名書きの、太平の世の政り事。』とうたわれている（杉山ほか訳 [1973]）。

⁴ これも有名な引用句を引けば、インドのネルー元首相は『民主主義と社会主義は目的のための手段であり、目的そのものではない。』と言ったとされる。

⁵ なお、本書尾尻論文（第 1 章）では、2010 年の大統領選挙で「リバータリアン運動」党首のゲバラ候補が躍進したことが述べられている。リバータリアニズムとは、まさに人々の自由を重要と考えるイデオロギーであり、このような政治運動との関係で、コスタリカ国民の意識が変わった可能性もある。

⁶ ちなみに、2009 年時点での各国の民主主義についての Polity IV と Freedom House の評価は付表 1 のとおりである。

付表1 中米・メキシコの民主主義の度合い

	コスタリ カ	エルサル バドル	グアテマラ	ホンジュラス	ニカラグア	パナマ	メキシコ
Polity IV	10	8	8	7	9	9	8
Freedom House	(1, 1, F)	(2, 3, F)	(4, 4, PF)	(4, 4, PF)	(4, 4, PF)	(1, 2, F)	(2, 3, F)

(注) Polity IV は政体の民主主義度を測っており 1～10 までで 10 が最も民主度が高い。Freedom House は左から順番に (政治的権利、市民権、自由度) を測っており、数字は 1～7 までで 1 がもっと権利が保証されている。F は Free、PF は Partly Free の略である。
⁷ 恒川 ([2006]) は『(前略) 亀裂の活性化によって民主主義体制が不安定化した時には、紛争が激化して再び民主主義の「学習」が始まる。』と述べているので、安定的な民主主義体制では学習は終わっていると仮定しているようだ。

⁸ この点で来年度は教育を扱った本書米村論文 (第 5 章)、社会保障を扱った本書宇佐美論文 (第 4 章) との関連を考えてみたい。また、本書狐崎論文 (第 6 章) との関連では、貧困層がどのような民主主義の価値を持っているかも検討課題となろう。

⁹ 例えば、Banerjee and Duflo [2008]、Castellani and Parent [2011]、Franco, et al. [2010], [2011]、Lora and Fajardo [2011]、Easterly [2001] が挙げられる。

¹⁰ アルゼンチン、ブラジル、チリ、コロンビア、グアテマラ、メキシコ、ペルー。

[参考文献]

〈日本語文献〉

杉山誠ほか訳 [1973] 『歌舞伎・浄瑠璃集』 河出書房新社。

鈴木興太郎・後藤玲子 [2002] 『アマルティア・セン—経済学と倫理学—【改装新版】』 実教出版。

恒川恵市 [2006] 「民主主義体制の長期的持続の条件—民主化の紛争理論に向けて—」 (恒川恵市編『民主主義アイデンティティ—新興デモクラシーの形成—』 早稲田大学出版部 1-23 ページ)。

〈外国語文献〉

Acemoglu, Daron, Simon Johnson, James A. Robinson, and Pierre Yared [2008] “Income and democracy,” *American Economic Review* 98 (3) (06), pp. 808-842.

— [2005] “From education to democracy?” *American Economic Review* 95 (2) (05), pp. 44-49.

Banerjee, Abhijit V., and Esther Duflo [2008] “What is middle class about the middle classes around the world?” *Journal of Economic Perspectives* 22 (2) (Spring), pp. 3-28.

- Castellani, Francesca, and Gwenn Parent [2011] "Being 'Middle-Class' in Latin America" OECD Publishing, OECD Development Centre Working Papers, 305).
- Easterly, William [2001] "The middle class consensus and economic development," *Journal of Economic Growth* 6 (4) (12), pp. 317-335.
- Franco, Rolando, Martín Hopenhayn, and Arturo León [2010] *Las clases medias en América latina: Retrospectiva y nuevas tendencias*, México: Siglo veintiuno editores.
- [2011] "The growing and changing middle class in latin america: An update," *CEPAL Review* (103) (04), pp. 7-25.
- Krueger, Alan B. [2007] *What Makes a Terrorist: Economics and the Roots of Terrorism*, Princeton: Princeton University Press (藪下史郎訳『テロの経済学：人はなぜテロリストになるのか』東洋経済新報社 2008 年) .
- Latinobarómetro, data files 1996-2009 (<http://www.latinobarometro.org/> 2012 年 2 月 1 日アクセス).
- Lora, Eduardo, and Johanna Fajardo [2011] "Latin American Middle Class: The Distance between Perception and Reality," Inter-American Development Bank, Working Paper Series No. IDB-WP-275.
- Lopez-Calva, Jamele Rigolini Luis, and Florencia Torche [2011] "Is there such Thing as Middle Class Values ? Class Differences, Values and Political Orientations in Latin America" The World Bank, Policy Research Working Paper Series: 5874.
- Mahoney, James [2001] *The Legacies of Liberalism: Path Dependence and Political Regimes in Central America*, Baltimore: John Hopkins Univ. Press.
- Sen, Amartya [1999a] *Development as Freedom*, New York: Anchor Books (石塚雅彦訳『自由と経済開発』日本経済新聞社 2000 年).
- Sen, Amartya [1999b] "Democracy as a Universal Value," *Journal of Democracy* 10 (3), pp. 3-17.
- Sen, Amartya [2009] *The Idea of Justice*, Cambridge, Massachusetts: Belknap Press (池本幸生訳『正義のアイデア』明石書店 2011 年).